

# 無教会キリスト教とは何か

社会学部社会学科 4年 12SG1269 渡部惇

## 目 次

目次	i
序章 本論文の目的と構成	1
第1章 無教会の出現	3
第1節 発端としての不敬事件	3
第2節 不敬事件の経緯	4
第3節 愛国とキリスト教	5
第2章 紙上の教会	7
第1節 教会からの脱却	7
第2節 『聖書之研究』と聖書研究会	9
第3節 読者宗教としての共同体	12
第3章 社会改良への試み	15
第1節 聖書研究者としての社会改良	15
第2節 メディア論による無教会の社会改良	16
第4章 現在の無教会主義	19
第1節 現在の無教会主義を調べる手法	19
第2節 NPO 法人今井館教友館	20
第3節 無教会運動としての聖書集会	22
終章 無教会キリスト教とは何か	23
注	24
参考文献	26

## 序章 本論文の目的と構成

日本社会において、キリスト教徒はマイノリティな存在である。文部科学省の『宗教統計調査』によると、2014年度（平成26年度）は、宗教団体に属する信者数のうち、神道系が約48%、仏教系が約45%であったのに対して、キリスト教系の信者数は、約1.5%の2,947,756人であった<sup>1</sup>。

では、日本社会においてマイノリティな宗教であるキリスト教は、社会に対して影響を与えてこなかったのかということそうではない。歴史的に見ると、日本の社会においてキリスト教が確かに受容されてきたことがわかる。キリスト教と日本社会の接点の歴史として、フランシスコ・ザビエルの宣教に始まり、徳川幕府による禁教令、明治時代の外国人宣教師の布教活動や社会貢献、大正・昭和期の社会運動家の賀川豊彦らによる社会事業活動などが挙げられる。また、キリスト教主義の大学も、立教大学や青山学院大学、上智大学など、カトリックやプロテスタントを問わず、日本に多く存在している。

そのように、社会においてキリスト教は、信徒の数は少ないものの、確かに受容され、社会の中で一定の役割を担ってきた。その受容と発展の歴史の中で、キリスト教界の内外に大きな影響を与えた運動のひとつに、「無教会主義」とよばれるキリスト教の運動がある。この無教会主義とは、明治から昭和初期にかけて活躍した思想家の内村鑑三によって主張されたキリスト教の一宗派である。特徴は、定式化された儀式、典礼、信条、規則や会堂などを持たず、教会の制度・組織などに対して消極的な態度をとり、神の言葉としての聖書に聴くことを重視し、救いは信仰のみによって与えられることを強調する点である。内村のそのような信仰の姿勢は、当時の青年学徒たちに強い影響を与え、塚本虎二<sup>2</sup>、矢内原忠雄<sup>3</sup>、黒崎幸吉<sup>4</sup>といった弟子たちを輩出した。彼らは戦後社会においてそれぞれ重要な役割を担ってきたが、彼らは「無教会知識人」とよばれ、戦中・戦後の日本社会の歪みを鋭く批判した人物として評価されている。そして現在各地で、これらの次の世代、もしくはさらに次の世代の人々によって聖書集会、聖書研究会が持たれている。

本稿では、そうした戦後社会に無教会知識人が現れ、また現在も無教会の集会が行われていることをふまえ、「無教会主義とは、いったいどのようなキリスト教なのか」について考察したい。

無教会や内村鑑三についての先行研究は豊富である。宗教学者の岩野祐介によれば、内村は聖書研究者として、捉えるべきであるとし、彼の活動は聖書研究からでる帰結に過ぎないとしている(岩野 2013)。また澁谷浩は、無教会の共同体の形成を論じるにあたって、

内村の「集会論」を「教会論」と呼び、無教会運動の中心は「集会」であるとしている（澁谷 1988）。しかし、これまでの研究は、内村や無教会主義の信仰の純粋性(聖書信仰)について論じられ、内村の「信仰は個人的なものである」という言葉に要約されるように、神と個人の関係が重視され、せいぜい聖書を教える「先生」との集会が、無教会主義の特徴であり、社会性、共同性についてあまり論じられなかった。

社会学者の赤江達也は、無教会キリスト教会を、内村が発行した雑誌・書物・小冊子によって、読者とつながる「紙上の教会」として着目している(赤江 2013: 25)。この主張は、これまでの集会や師弟関係に重点を置いた無教会主義の理解に、新たな視点を提示している。また、無教会知識人たちが、その信仰のゆえに日本社会を批判したとしているが、赤江は、彼らが信仰心と同時に強い「愛国心」の持ち主であったという事実を見落としていと指摘する。そのように、無教会主義を捉え直す試みは確かに新しい主張である。

本稿が目指すのは、「紙上の教会」という赤江の主張を取り入れつつ、「無教会キリスト教とはいったい何であるのか」について論じる。制度や宗教的儀式を持たない無教会主義のキリスト教がどのように形成され、社会と関わったのかについて考察し、無教会キリストが単なる宗教的グループではなく、「雑誌や書籍などの活字を通して、私たちの生活を見直す機会を提供する思想なのではないか」と仮説を立てて論じる。その時に、本稿の先行研究である赤江による手法、すなわち内村の自伝や彼に影響を受けた人物たちの記録から思想を読み解き、無教会主義の社会に対しての働きかけに注目しながら、論じていく。また、赤江による先行研究にはなかった、現在の無教会主義の活動がどのように行われているのかを調べ、無教会の意義を再検討する。

本論文の構成は以下のとおりである。第一章は、無教会主義の発端となった不敬事件から、「日本人であること」と「クリスチャンであること」を彼らがどう調整していたのかについてふれ、そこから無教会主義の原型を見ていく。第二章は、「紙上の教会」としての無教会を論じていく。無教会はしばしば、集会としての無教会と捉えられがちであるが、赤江の主張から、雑誌によるネットワークを駆使した「紙上の教会」捉えるべきである、という視点で無教会を論じる。第三章は、内村の語りから、彼の「社会改良」に対する考えを抽出し、無教会主義にとって「社会改良」とは何かを考える。その際、内村の信仰による社会改良だけではなく、「紙上の教会」である無教会がどのように社会改良と結びついていったのか考察する。第四章は、現在の無教会主義の活動拠点のひとつである、NPO 法人今井館教友会や無教会聖書集会を取り上げ、現在の無教会主義がどのように活動をしてい

るのか調べたうえで、無教会主義の社会性について論じる。

以上の構成から無教会について論じていく。なお、内村鑑三全集から引用した出典の表記は、(内村鑑三全集 巻数:頁数)とした。

## 第1章 無教会の出現

### 第1節 発端としての不敬事件

「不敬事件」とは、1891年(明治24年)の1月9日に、当時、内村が教師として働いていた第一高等中学<sup>5</sup>の講堂で行われた教育勅語<sup>6</sup>の奉読式の場で、内村が明治天皇の親筆の署名に対して最敬礼を行わなかった事件である。内村の行動に対して、同僚の教師や生徒らは非難し、当時の社会において問題視された。

この出来事は、教師であった内村の振る舞いによるものだが、赤江によれば、この不敬事件が、「近代天皇制」あるいは「国家神道」の成立過程における「信仰にもとづく拒否」として位置づけられてきたと主張している(赤江 2013:37)。

無教会キリスト者であり、聖書研究者の関根正雄は、自身の著書『無教会キリスト教』において、その事件の現場をこのように表している。

先生は当時第一高等中学校の講師であられたが、明治天皇の御署名入りの教育勅語の拝戴式に於て、命ぜられた勅語への礼拝を身を以て拒否せられたのである。キリスト教に於ては唯一の真<sup>まこと</sup>の神以外を礼拝することを許さず、先生は自らの死を賭してもこの一戦を守りぬこうとされたのである。我々は衆人環視のなかに一人毅然として屹立し礼拝を拒否せられた瞬間の先生の巨姿を思い浮べ、今尚戦慄を禁じ得ない。(関根 1981:3)

このように事件の様子を書いている関根は、事件当時を生きているわけではない。にもかかわらず、このように事件を描写し、当時の内村の心情を察しているのは、内村が「信仰」によってそのような拒否という態度をとったのだ、という定説があったことを意味する。

また哲学者でフランス文学者の森有正は、内村鑑三伝において、内村のふるまいは「神

以外のものを断じて拝すまいとする瞬間的な良心の感覚」によるものであり、それによって「天皇神格化とそれに象徴される国家至上主義」がキリスト教の神を信じる内村によって「原理的に否定された」と主張している（森 1979:267-268）。

しかし赤江は、これまでの研究でも「信仰による拒否ではない」と述べられていることを認めつつも、「信仰による拒否」という評価が維持されてきたことに対して、内村自身が「断固たる拒否ではない」と語っていたことを考えると、そうした評価は修正されるべきだとしている（赤江 2013:38）。この事件をきっかけに、内村は宗教思想家として活動していくが、この事件が内村にとって一体どのような意味合いを持つのかを考えることは、その後展開される無教会主義の考察に大きな影響を与えるであろう。

## 第2節 不敬事件の経緯

内村による不敬事件が無教会主義の発端として、また不敬事件の語られ方を見直す重要性について述べてきたが、この不敬事件そのものの経緯について触れたいと思う。

事件が起きたのは、1891年（明治24年）の1月9日の東京本郷区向ヶ岡にある第一高等中学校（後の第一高等学校）の始業式であった。

奉拝式は事前に知らされていたので、キリスト者の教員は欠席をしていた。しかし、内村はこの奉拝式にあえて出席する。また、校長は病気で欠席しており、教頭が代理を務めた。

奉拝式が始まり、校長代理のよる勅語の奉読、そして教員と生徒が教育勅語の前に立ち、お辞儀（奉拝）をするという儀式が行われた。しかし、内村自身の体験談によると、儀式に先立って、「教育勅語に向けて礼拝的低頭を為せよと、時の校長代理理学博士某<sup>7</sup>に命ぜられた」（内村鑑三全集 16:509）と語っている。すなわち、内村らキリスト者にとってこの奉拝式による儀式は、「礼拝」という意味を帯びていることになる。

まず進み出た教師たちが勅語に対して深々と最敬礼を行い、内村に順番が回り、前の人たちと同じように壇上に上がり、勅語の前に立った。内村は、彼自身の言葉によれば、「ずいぶんためらった」あげく、「チョット頭をさげた」という。その行為が、講堂内で激しい反応を引き起こした。内村によれば、まず生徒たちが非難の声をあげ、教師たちがそれに続いたとしている（内村鑑三全集 36:332）。また、一人の教員がお辞儀をやりなおすよう求めるも、内村は「お辞儀は何度もする必要はない」として拒否をしている。

事件の後日、事態を收拾しようとした校長から、お辞儀をやり直すよう説得され、内村はそれに同意する。しかし、内村は流行性感冒<sup>8</sup>にかかり、また肺炎と腸チフスで倒れたため、同僚の木村駿吉が内村に代わってお辞儀をやり直した。

こうした一連の事件は当時の社会に波紋を広げていった。赤江は、これらの内村のふるまいは、一見するとわかりにくく、「信仰による拒否」による一般的な解釈では容易に回収することができるものではないが、内村に一貫性がなかったわけではないと主張する（赤江 2013:40）。では、内村はどのように考えて、そのような振る舞いをしたのだろうか。

### 第3節 愛国とキリスト教

内村の不敬事件による一連の振る舞いはいったい何なのであろうか。内村自身は、自身の振る舞いに対して、「お辞儀は礼拝を意味せず」という見解を持って式に参加しようとしていたが、そのお辞儀の瞬間に、内村がお辞儀をすることができなかつたのは、「拒否」ではなく、「ためらいと良心のとがめ」であったとしている（内村 1949:57）。内村は自身の教育勅語に対する振る舞いを「ためらい」と語っている。前述にもあるが、過去の研究において、内村の振る舞いは「信仰による拒否」と捉えられがちであったが、内村はジレンマに陥っていたといえる。赤江によれば、内村は、愛国的キリスト信徒であるが故に、お辞儀もできず、またそうしないこともできなかつたと主張している（赤江 2013:57）。内村はキリスト者であると同時に、愛国的な一面を有していたと赤江は指摘する。

内村の愛国的な一面をみせたエピソードとして、内村が教頭になった北越学館<sup>9</sup>での出来事がある。この学校では、組合協会系の外国人宣教師たちが無給で教えていたのであるが、内村は「愛国々民主義」というスローガンを掲げて宣教師の排斥を起し、自身が辞任する事件を起こした（内村鑑三全集 1:172）。また内村は、この北越学館での事件の前後に、アメリカの友人に対して、自身を「極左の愛国的キリスト教徒」と呼んでいる（内村鑑三全集 36:308）。

また、内村の代表的な主張の一つである「二つのJ」<sup>10</sup>からも、愛国的キリスト者としての内村をうかがわせる。内村は、強い愛国心を持ったクリスチャンであり、ナショナリストの側面があったといえるだろう。

しかしながら、愛国的クリスチャンであった内村が、そのようにためらったのは、単なる「信仰」と「愛国心」の葛藤によるものではない。小沢三郎によると、教育勅語に対す

る拝礼を行うことへの可否という観点から、当時のキリスト者の主張は必ずしも一様ではなく、可拝論と非拝論に大別されるとしている（小沢 1961:159）。すなわち、同じキリスト者であっても教育勅語に対する態度の仕方で意見が分かれているのである。赤江によれば、内村は可拝論と非拝論でいえば、可拝論に近い立場をとっていただろうとしている（赤江 2013:51-52）。

しかし、内村自身は当時の奉拝式の心境を次のように語っている。

怖ろしいときだつた。面倒になりそうだということは前から分かっていたので、クリスチャンの同僚（中島力造、木村駿吉）は当日ワザと休んでしまった。僕も休もうかと思つたが、出来なかつた。いよいよ僕の番が来た時、ずいぶんためらつた。余程オジギしようかと思つた。しかし当時すでに僕に頼っていた学生が十数名居て、ジッと僕を見ているのだ。それを思つた時、ドーしてもオジギ出来なかつた。僕はチョット頭を下げた。それからアンナさわぎになった（内村 1949:61）。

この時の内村は愛国者として、奉拝式において「礼拝」ではなく、「敬礼」としてお辞儀をしようと思っていたが、自分を慕っている学生の前ではお辞儀をすることに対する躊躇する心理が働いていたことがわかる。この場面での慕っている学生とは、内村と同じクリスチャンであるが、前述にもあるように、キリスト教徒の中でも、意見は分かれていたもので、彼ら学生の中でも、お辞儀することをよしとしない学生もいたと内村は考えたであろう。

そのように、内村は愛国的キリスト者として、困難に直面していた。赤江はこうした不敬事件に対する内村の奇妙な立場を、愛国的キリスト信徒が避けることのできない困難の所在を示しているという（赤江 2013:58）。そして、そのようなジレンマのゆえに、内村は勅語に対して、「ゆるぎない信仰」によって拒否したのではないことがわかる。

内村のこの「ためらい」による事件により、世間からもキリスト教界からも非難されるようになってしまう。内村は両者からの批判に対して、世間の人々は、自分が結局お辞儀することに同意したという事実は確かめずに、当初のためらいという行為で、断固たる拒否をしたと判断し、一方で長老教会の人びとからは、ためらいながらお辞儀したことを、内村が政府の権威に屈服したと判断され、軽侮の言葉をあびせられたという（内村 1949:58）。



この内村の語りから、「ためらい」という行為のみで、世間の人々は天皇に対して不敬な態度をしたという批判をされた一方、同じキリスト者たちからは、権威に屈したキリスト者として評価されたことがわかる。この一連のキリスト教内外からの批判から、内村は既存の教会から距離を置くようになる。こうして、内村が無教会主義を唱える下地が出来上がっていった。

## 第2章 紙上の教会

### 第1節 内村の教会観

第1章では、無教会主義を主張する経緯としての不敬事件について述べた。内村に対する過去の研究や語りでは、内村の「信仰による拒否」として事件をとらえられてきたが、そうではなく、愛国的キリスト教徒としての「ためらい」があったこと。それによって、世間からもキリスト教界からも批判を受けることになったことがわかった。

では、そうした状況の中で、内村はどのように無教会主義を主張していき、その思想を広げていったのか。この章では、その思想の広がり注目しながら、無教会を捉えていく。

前述のとおり、世間とキリスト者としての板ばさみで苦しんだ内村は、教会からも距離を置くようになった。内村は、1893年に「文学博士井上哲次郎君に呈する公開状」を發表し、不敬事件から、キリスト教やキリスト教徒を批判した井上哲次郎に対して自分の立場を表明する。それは、「日本」と「キリスト教」は決して対立する概念ではなく、両立するものであるという。赤江によれば、この「公開状」の狙いは、「キリスト信仰は愛国心と対立するはずだ」という主張の前提そのものを失効させることであった（赤江 2013:59）。内村のこのような主張は、信仰と愛国の両者とも肯定する試みであったといえる。

しかし、内村のこの主張は、キリスト教批判者のみならず、キリスト者からも受け入れられなかった。むしろ、宣教師や神学者から、過酷な批判を受けた。そうした、批判によって内村は聖書こそが「孤独者の楯」であり、教会に依らなくても「全能者と直接の交通を為し得べき」ことを知っていく。また内村は、教会は真理を学ぶことにおいて「善良なる扶助」であっても、真理は「教会の外に於ても」学ぶことができると考え始める（内村鑑三全集 2:25-31）。

このようにして内村は、制度としての教会から離れ、聖書そのものへの信仰を持つよう

になっていくが、1893年の最初の著書『基督信徒の慰』の中で、初めて「無教会」という言葉を使う。

余は無教会となりたり、人の手にて造られし教会今は余は有するなし、余を慰むる賛美の声なし、余のために祝福を祈る牧師なし、然らば余は神を拝し神に<sup>ちかづ</sup>近く為めの礼拝堂を有せざる乎。(内村鑑三全集 2:36)

ここでの無教会とは、赤江によれば、キリスト信徒にとって「教会の無い」状態を意味する概念であり、そのような状態を否定的な意味で用いられている(赤江 2013:61)。

ところが、内村は自らを無教会ではないと語る。なぜなら、一般の教会を出て、山に登って風の音を聞くなど、自然の中にいるとき、内村はそこに別の教会を見いだしているからである(内村鑑三全集 2:36-37)。内村はまた、次のように語っている。

嗚呼神の教会を以て白壁は赤瓦の内に存するものと思ひし余の拙なさよ、神の教会は宇宙の如く広く、善人の多きが如く広し、余は教会に捨てられたり而して余は宇宙の教会に入会せり。(内村鑑三全集 2:33)

内村は、「宇宙の教会」を見出し、「神の教会」とは、教会の建物などの建築物のことでなく、宇宙そのものを教会と見なしていた。それゆえ、内村は、一方では無教会であり、他方では無教会ではないと主張していることになる。赤江は、こうした内村の発言から、建物としての「教会」を持たないがゆえに無教会であるが、宇宙が教会であるとしたら、内村自身は無教会ではないということになるとしている(赤絵 2013:63)。

すなわち、この時点では内村は、宇宙を無教会と見なしてはいないことになる。そのため、内村は無教会と呼べるような場所を見出してはおらず、時によっては建物としての教会で礼拝に参加することを余儀なくされる。内村の「無教会」の思想ができつつあるが、無教会主義の実践の場を見出してはいなかった。

このように、内村は教会から離れる理由として、不敬事件がきっかけであったことがわかり、それによって、世間やキリスト者の中からも非難され、自分のよりどころを聖書に置くようになっていた。しかし、内村が教会を離れていく動機は、この不敬事件より以前にあった。内村が札幌にいたときには、宣教師と札幌独立教会<sup>11</sup>の設立にあたって衝突し、

アメリカ留学時には、神学校に入学するも失望して退学し、前述にもあるがキリスト教系学校の北越学館で宣教師の排斥運動もする。

そのような内村は、自身の著書『余は如何にして基督信徒になりし乎』において、西洋のキリスト教徒によって使われる「教会」という制度が日本では適さない理由を次のように説明している。

我々がその国民生活二千年のあいだに慣れてきた<sup>な</sup>道徳的宗教的教授方法は、テキストによる説教、講壇からの演述という方法ではない。我々には徳育と知育のあいだに何らの差別はない。学校は我々の教会である、そして我々はそこで自分の全存在を育て上げるものと思われている。宗教の専門<sup>な</sup>という観念は我々の耳にはきわめて奇異に、また反発てきにさえ響く。坊主は我々にあるにはあるが、彼らには本来は寺の番人であって、真理と永遠的<sup>な</sup>真実との教師ではない。我らの道徳的<sup>な</sup>改革者はすべて、文字と学問を終えたと同時に霊のことを教えた、教師であり、『先生』であった。(内村 1938:192-193)

この内村の考えに対して赤江は、教会制度は宗教の専門機関であり、日本は伝統的に徳育と知育の区別が存在してこなかったのであり、内村の考えでは、重要な事であったとしている(赤江 2013:66)。また赤江は、内村にとって重要であったのは、徳育と知育の一致であり、知識を学校で学び、徳育としての宗教を教会で扱うのは、内村にとって不十分であったとする。そのうえで、道徳と政治をともに教えていた伝統的な学校(藩校)が、「我々の教会」というべき場所として考えていたのではないかと主張する(赤江 2013:66)。そうした内村の徳育と知育の一致という思想は、内村を教会からも学校からも距離をとらせ、内村は伝道方法を他の場所に見出していく。

## 第2節 『聖書之研究』と聖書研究会

内村は1893年に『基督信徒の慰』を刊行した後の5年間で、『求安録』や『地理学考』(のち『知人論』と改題)などといった代表作を次々と出版する。そして1897年に、朝報社に入社し、新聞『萬朝報』の英文欄主筆となる。内村は、この『萬朝報』で7年間働い

ていくわけであるが、その活動のかたわらで、新たな活動をしていく。『萬朝報』での活動をいったんやめ、1898年に東京独立雑誌社の立ち上げに参加し、『東京独立雑誌』の主筆となる。しかし、主筆まで任されるようになったものの、東京独立雑誌は解散されることになり、内村が主筆を務めたこの雑誌も創刊から2年余りで幕を閉じることとなった。

内村は、『東京独立雑誌』終刊後に単独で聖書研究社を立ち上げ、新たに『聖書之研究』という宗教雑誌を創刊する。内村は、欧米の宣教組織からの援助に頼らない、経済的に独立した伝道方法を模索していた。そのため、ジャーナリストとしての経験から、この『聖書之研究』という雑誌による、キリスト教伝道をしていくことを決意する。

内村は、1900年に『聖書之研究』を創刊する。前述にもあるが、内村は、『東京独立雑誌』を出版するも、道半ばで頓挫してしまった。内村は、この『聖書之研究』を出版した際、『東京独立雑誌』との関係を次のように語っている。

「聖書の研究」雑誌は「東京独立雑誌」の後進なり、彼なる者は殺さんが為に起り、是なる者は活さんが為めに生れたり、彼なる者は傷けんが為めに剣を揮ひ、是なる者は癒さんが為めに薬を投ぜんと欲す、責むるは彼の本分なりしが、慰むるは是の転職たらんと欲す、義は殺す者にして愛は活かす者なり、愛の宣伝が義の唱道に次ぐべきは正当の順序なり、「聖書の研究」雑誌は当さに此時に於て起るべきものなり。(内村鑑三全集 8:282)

すなわち、内村にとって『東京独立雑誌』は「義の唱道」を目的とする雑誌であったが、『聖書之研究』は「愛の宣伝」を行うものであったことがわかる。また、内村は『聖書之研究』を出版した目的を次のように語っている。

是を「聖書之研究」と云ふ、然れども是れ必しも聖書の講義録の類にあらず、余輩の目的は聖書を広義的に解し、其伝ふる教義を吾人今日の実際的生涯に適用し、以て基督教の人生観を我邦人の中に吹入せんとするにあり、余輩は勿論号を逐ふて其文字的註釈にも従事せんと欲す、然れども聖書を古典の類と見做し、是を解するに当らず触はらずの方針を取るが如きは余輩の努めて為さざる所なるべし。(内村鑑三全集 8:286)

この内村の語りから『聖書之研究』とは、日本人に対してキリスト教の価値観を提供す

るもの、すなわち伝道を目的に出版されたことがわかる。

内村は、『聖書之研究』の第 2 号において、「読者の予想外の歓迎」を受けたと報告している（内村鑑三全集 8:471）。第 1 号の発行部数は再販を含めると、3000 部に達するものであったという。その予想外の反響に対して内村は、「雑誌に従事してより未だ會てない需要」があり、「殊に地方の読者よりの同情と注文とは実に非常であつた、如何にも自分の雑誌でも出たやうに喜んで注文して喜んで注文してよこした読者も大分あつた」と語っている（内村鑑三全集 8:480-481）。この語りから、内村自身もこの反響に驚いていたことがうかがえる。

『聖書之研究』が、内村自身も驚くほどの反響を受けた理由として、赤江は内村の知名度や書き手としての魅力のほかに二つの理由を提示している。一つ目の理由として、日清戦争から日露戦争にかけて、読者文化が固有の厚みを持ちはじめたことを挙げている（赤江 2013:71-72）。この赤江の主張の根拠として、メディア史研究家の永嶺重敏によれば、日清戦争後の時期において、近代教育を受けた人びとの増加によって読者市場が形成され、さらには「読者社会」という意識が生じていたことを挙げている（永嶺 1997:11-18）。

また二つ目の理由として、当時の社会が宗教や哲学が青年たちの煩悶を表現する方法として人気を集めており、ある若者たちは、内村の雑誌を読むだけでは飽き足らず、内村の下へ集うようになるほどであったからだとしている（赤江 2013:72）。

このようにして、『聖書之研究』という雑誌が人気を博し、雑誌による聖書の研究と伝道を内村は実践し始めていく。内村は、この雑誌による活動から、聖書をともに読み、研究していく場所を見出していたことがわかる。

雑誌『聖書之研究』とならぶ、内村の活動のもう一つの柱は、「聖書研究会」という聖書講義であった。内村は、すでに毎週日曜に家庭集会を持っていたが、1901 年（明治 34 年）の初頭に、『聖書之研究』の読者の中から、内村によって許可されたものが参加する日曜集会が開かれる。この日曜集会の経緯として、「夏期講談会」<sup>12</sup>によってできた「独立倶楽部」や、学生を中心とする「角筈聖書研究会」<sup>13</sup>があるが、赤江によれば、こうした内村の雑誌の読者が、イベント（講談会や講演会）に参加し、集会や団体を形成または参加するという流れが無教会運動にとって重要であると主張する（赤江 2013:74）。このようにして、『聖書之研究』の読者が、講演会や読書会といったイベントを経て、集会や団体の会員となっていく。この日曜集会は、毎週日曜日の午前にも新宿角筈にある内村の自宅で行われていった。この集会によって、多くのエリートたちが集まり、後の弟子たちを生み出す集まりと

なっていく。

### 第3節 紙上の教会

内村は、1901年(明治34年)の3月に、『聖書之研究』とは別に、『無教会』という投書雑誌(小冊子)を創刊した。この雑誌のタイトルである「無教会」とは、『基督信徒の慰』からきているが、この「無教会」という言葉を雑誌のタイトルにしていくのである。その言葉の意味を、内村は次のように語っている。

「無教会」と云えば無政府とか虚無党と云ふやうで何やら破壊主義の冊子のやうに思はれますが、然し決して爾んなものではありません、「無教会」は教会の無い者の教会であります、即ち家の無い者の合宿所とも云ふべきものであります、即ち心靈上の養育院か孤児院のやうなものであります、……さうして世には教会の無い、無牧の羊が多いと思ひますから茲に此小冊子を發刊するに至つたのであります。(内村鑑三全集 9:71)

ここで内村は、「無教会」とは無政府主義のようなことを指すのではなく、「教会の無い者の教会」、または「家の無い者の合宿所」のようだとしている。赤江によれば、無教会が「教会の無い者の教会」とされていることを、無教会概念に新たに与えられた定義であるが、『基督信徒の慰』における「教会の無い」状態という定義と大きく異なっていると主張する(赤江 2013:78)。そのような2つの無教会の定義において、「無教会」、すなわち「教会の無い者の教会」とはいったい何なのかという問いが出てくる。その答えのひとつとして、内村は「宇宙の教会」という概念を有していた。

神の造 つくられた宇宙であります、天然であります、是が私共無教会信者の比世に於ける教会であります、その天井は蒼穹あそぞらであります、其板に星が鑲めて有ります、其床は青い野であります、その畳は色々の花であります、其樂器は松の木梢こしげであります、其樂人は森の小鳥であります、其高壇は山の高根であります、其説教師は神様御自身であります、これが私共無教会信者の教会であります……(内村鑑三全集 9:73)

この概念は『基督信徒の慰』においても持っていたが、その際、内村は「余は無教会にあらざるなり」と書いていた。しかし、ここでは無教会信者のための教会が「宇宙の教会」として捉えられている。そこに内村の「無教会としての教会」の変化が見られる。

しかし赤江は、「無教会信徒にとっての教会とは何か」という問いに対して、「宇宙の教会」と答えるのは不十分であるとしている（赤江 2013:80）。不十分であるその答えに対して、赤江は雑誌そのものに『無教会』という名前が付けられていることに注目し、そのことがもう一つの答えであるとしている（赤江 2013:80）。赤江がそのように主張する根拠として、雑誌『無教会』の第一号の巻末に掲載された読者宛の告知欄での内村のメッセージに注目する。

#### 読者諸君に告ぐ

「無教会」は本誌并に「聖書之研究」読者の交通機関なり、故に読者は何人も其誌面に投書するの特権を有す、但し余り長言を避くべし、地方の状態甚だ可なり、且つ心中の憂愁を訴へよ、或いは読者中之を癒すを得る者あらん、願わくば其誌面をして実物的教会たらしめんことを、

主筆白す（内村鑑三全集 9:519）

このメッセージにおいて、内村は『無教会』を、『聖書之研究』などの内村の雑誌を購読することによって形成される「読者の交通機関」として捉えている。読者は投書をする権利を持っており、赤江によれば、「地方の状態甚だ可なり」とは、読者の住む地方の状況を報告してもよいことであり、それと同時に自分の心境を書き送ることを勧めているとしている（赤江 2013:81）。

本誌は元々教友の交通機関を目的として発行した者でありまして、一名之を『紙上の教会』と称へても宜しい者であります。即ち私共行くべき教会を有たざる者が天下の同志と相互に親愛の情を交換せんために発行された雑誌であります、夫れ故に本誌は独立雑誌や聖書之研究とは違ひ記者が筆を執ること割合ひに少く読者が報と感とを伝ふること割合に多かるべき性質の雑誌であります、読者諸君は能く此事を心に留めて居いて下さい。（内村鑑三全集 9:316）

赤江は、「無教会信徒の教会とは何か」という問いかけに対するもう一つの答えとして、内村が言う「紙上の教会」をあげる（赤江 2013:81）。

この「紙上の教会」という概念こそ、無教会主義の中心となるものであり、過去の研究において、それまで重要視されてこなかった考えである。投書によるやり取りによって、読者たちは、聖い教会を見出していく。

ただ、雑誌『無教会』は、1902年（明治35年）の8月に終刊することとなる。創刊してからわずか一年の期間で終わってしまったが、「紙上の教会」という概念は、『聖書之研究』に引き継がれ、読者の交通が「紙上の教会」の性質を帯びていく。

では内村は、建物としての教会と対比して、「紙上の教会」に何を見出そうとしていたのだろうか。赤江は、集会とは別の形の「非場所的かつ媒介的な共同性」を「紙上の教会」に見出していたとしている（赤江 2013:93）。この指摘は、「紙上の教会」としての無教会主義の独自性を表すものである。宗教としてのキリスト教の礼拝は、チャペルや礼拝堂といった決まった場所に、人々が集まって行われるものである。しかし、「紙上の教会」としての無教会は、各地に散らばっている信徒によって行われる。

また赤江は、この「紙上の教会」は、「弱者」を主体とした制度であったとしている（赤江 2013:100）。その根拠として、内村は、雑誌『無教会』において、題字の脇に「孤独者の友人」という標語が掲げ、地方の人々や「少女と老人の友」となることを謳っていた（内村鑑三全集 9:72）。内村自身も、不敬事件の際に、断固としての拒否をしたのではなく、いろいろな思いを巡らせ、「ためらい」をした弱さを抱えた人物として振り返っており、「紙上の教会」では「弱者」を主体にしている。

そうした「弱者」を主体として、内村は「紙上の教会」を立てあげるが、彼が理想とするクリスチャンとは、教会にも国家にも依存しない者であり、それを「独立信者」と呼んでいる。

基督信者なる者は元来独立の者であります、依頼する者は基督信者ではありません、基督を信ずると称するも外国宣教師や、彼等の建てた教会に依頼する者は実は未だ基督を信じない者であります、独立は信徒の信仰の唯一の試験石であります、独立心なき者には信仰はない者と見て間違まちがはありません。（内村鑑三全集 10:64）

赤江によれば、こうした「独立信者」は英雄的な強い主体を想定しがちであるが、そう



ではなく、教会の内外に関わらず存在し、外見だけではクリスチャンかどうかわからないような、無名の平信徒たちであるという（赤江 2013:100-101）。また内村は、そうした「独立信者」たちを、「隠れたる、而して散乱せる、多くの孤独の独立信者」としてとらえている（内村鑑三全集 13:147）。「紙上の教会」は、そうした信者たちを結び合わせる一つのネットワークであり、共同体であったのである。

実際に、1917年（大正6年）の『聖書之研究』の200号では、「読者の所感」欄への読者の投稿は、農家17%、商家14%、工人4%、教師15%、婦人6.7%、軍人2.2%、官吏5.2%であった（赤江 2013:125）。これらのデータから、この「紙上の教会」は多様な職業層にまで広がっていたといえる。このように、各地に散らばる読者の共同性は、内村が想定する「紙上の教会」そのものであったといえる。

これまで、無教会主義がどのような経緯で生まれ、また内村にとって「無教会」とはどのような思想であったのかについて、彼の著作や、先行研究の赤江の主張をもとに論じてきた。赤江は、内村の想定していた無教会とは、「教会の無い者たちの教会」であり、かつ「雑誌メディアによって媒介された読者＝信徒のネットワーク」であったとしている（赤江 2013:95）。内村は、雑誌というメディアを利用することで、弱い主体である「独立信者」の信仰を守り、また聖書や信仰に対する意見の交換を実践した。

ただし、信徒のネットワークと位置づけられると、社会から遊離した孤独のうちにある個々人がかろうじて内村の発行する機関誌を通じてつながっていった、という解釈をもたらす。無教会は本当に内村のような強い個性に導かれる孤独な信徒の集合体だったのだろうか。無教会主義は当時の日本社会とどのように関わっていったのだろうか。次章では、無教会がどのように社会と関わっていったのかを見る上で、「社会改良」という側面から、無教会を捉えていきたい。

### 第3章 社会改良への試み

#### 第1節 聖書研究者としての社会改良

思想史研究において、内村が無教会主義を唱え、『聖書之研究』を発行したことは、社会性や政治性の喪失であるとされ批判されてきた（家永 1956:1998;土肥 1962）。では、『聖書之研究』による活動は社会に対しての働きかけが何もなかったということなのだろうか。

そうではない。『聖書之研究』を出版したその時期、内村は外国宣教によらないキリスト教こそ、「余が主として目下従事しつゝある社会改良事業である」と語っている(内村鑑三全集 9:480)。この内村の主張から、無教会の社会性について考えていくが、内村の語る「社会改良」は無教会主義にとってどのようなものであったのだろうか。

岩野は、内村の社会改革に関する基本的な主張は、社会を改革するには、社会の構成要素である個人の改革であったとしている(岩野 2013:187)。その根拠として内村は、1903年(明治36年)の「社会は如何にして改良さるべき者なる乎」で次のように語っている。

社会とは他の者ではない、是れは人間の集合<sup>たい</sup>体である、故に社会を改良する法は我自身を改良する法である、我自身を改良し得ない者は社会改良を口にするの権利を有<sup>も</sup>たないのみならず、斯<sup>か</sup>かる人は必ず社会を改良し得ないものである。(内村鑑三全集 11:345)

この「社会は如何にして改良さるべき者なる乎」による内村の主張を見ると、彼はキリスト教による救済によって個人を変革させ、それによって社会も改革されると考え、試みたように思える。しかし、そうした内面の変化だけの側面だけでは、無教会独自の社会改良は見えないのではないだろうか。すなわち、雑誌によって「紙上の教会」を想起した内村は、そうしたネットワークを社会改良のどのように結び合わせていたのか考えなければならぬ。では内村は、『聖書之研究』による「紙上の教会」をどのように社会の改革につなげていったのか。

## 第2節 メディア論から見た無教会の社会改良

1902年(明治35年)、「理想団」<sup>14</sup>の晩餐会の席上で、キリスト教社会主義者である安部磯雄と内村の会話のやりとりを堺利彦が『萬朝報』で紹介している。

内村君は「個人を作らねば駄目だ」という云ふ。安部君は「個人を作るとともに社会の組織を改めねばならぬ、社会の進歩は人が両足で右ひだり一歩づゝ歩く様な者で、個人が一歩前に進んで社会組織を率ゐる時もあれば、社会組織が一歩前に進んで個人を導く時もある」と云ふ。安部君の談話の跡<sup>あと</sup>で、内村君が安部君に向つて「総て賛成

です。只、あなた方が汽車や鉄道を作る時に私はダイナマイトを詰込んでトンネルを作つて置かうと云のです」と笑ひながら云ふのを聞いた。(堺 [1902]1984:52-53)

内村は「個人を作らねば駄目だ」と主張し、安部は「個人を作る」とともに「社会組織」を作った上で、両者を補い合うようにすべきであると主張する。内村は、安部の主張に賛成と答えるが、「只、あなた方が汽車や鉄道を作る時に私はダイナマイトを詰込んでトンネルを作つて置かうと云のです」と言っている。赤江によれば、ここでの「汽車や鉄道を作る」というのは、「社会組織」が必要であるという安部の主張からきている(赤江 2013:103)。では、この「ダイナマイトを詰込んでトンネルを作つて置かう」という内村の発言は一体何を意味するのか。

赤江は「ダイナマイト」と「トンネル」という比喩に着目している(赤江 2013:104)。内村は、ダイナマイトを「近代文明」の象徴と見なしているが、それと同時に「キリストの福音はダイナマイトであります」という言葉にあるとおり、ダイナマイトを「キリストの福音」の比喩としても用いられている(内村鑑三全集 20:429)。また、内村は福音が言葉であることを強調しながら、伝道者を「言葉売る者」とし、伝道という行為を「言葉の伝播」として捉えている。

伝道とは神の道を伝ふる事である。故に之は重に舌と筆とを以て為さるゝ仕事である、故に一見すれば至て容易なる且つ皮相の仕事のやうである、即ち米を作り衣を織るに比べて不生産的の仕事のやうに見える。

成程伝道は重に言葉の伝播であるに相違ない、然し言葉とて必しも音声ばかりではない……

仏国革命者の一人なるモンテーヌといういふ人は曰ふた「言葉は物である」と、伝道者は言葉売る者であるから彼は世に供するに惟空を以てするものである、と思ふのは大間違である、伝道者の言葉は空ではない物である、実物である、彼は決して社会の無用物ではない。(内村鑑三全集 9:338)

内村は、「紙上の教会」において、言葉を雑誌というメディアを媒介にして伝播させている。内村にとって、ダイナマイトとは「キリストの福音」を言葉として読者に伝え、回心

させるものであったのである。

では、「外国宣教師に頼らざる基督教」を伝播させることが、なぜ「社会改良事業」にながっていくのはなぜか。その問いかけに対する答えとして、1901年に行われた、「今日の最大要求物」と題した講演の中にある。内村が無教会を主張したのは、東京に電機や水道といったインフラが普及するような、近代を象徴する時代であった。そこで、内村は信仰の必要性を語るうえで、信仰を「機械を動かす力」としての「電気」に例えている。

今日の社会は其の生命の源に何か大変な狂ひがきて、其為めに療治の力を失うて居るのではない乎、一個人の問題家庭の問題事業上の問題皆然り、病源は分つて居る、療治法は分つて居る、が悲哉<sup>かなしいかな</sup>之を療治する力が全く無い。……改良の方法は今や残らず言ひ尽くされてある、唯肝腎<sup>かんじん</sup>な〔の〕は其方法を動かすモチブ、パワー電気電流である、如何にすれば機械が動くか、それは能く分て居る、されど非常に大きい発電所があつてそこから電気がやつてこなければ全く無効である。機械を動かす力、悪を蛇蝎<sup>だかつし</sup>視する力、喜んで全を遂行する力、吾等の欲求は一に此偉大なる力を獲るに存して居るのである。(内村鑑三全集 9:299)

ここでは、内村は人間を機械として捉えており、その機械である人間を動かすのに必要な電気を信仰と表現している。ただ、その電気としての信仰は、その機械そのものから発生するものではなく、「非常に大きい発電所」のように外部からくるものであるということである。また内村によれば、「法文、命令、宣教師学校、日曜学校、これらも亦一の器械<sup>ママ</sup>に過ぎない」としている(内村鑑三全集 9:299)。すなわち、内村は制度や社会が機能させる電気=信仰も、それらの外部からくるものであるということになる。そして、内村はエネルギー源の「信仰」は、制度である教団組織には属さないと考えていたことになるのである。

赤江は、「紙上の教会」は従来のキリスト教組織の外で、雑誌の流通する回路を作り出す企てであったとしている(赤江 2013:106)。一方、内村は「紙上の教会」の理想を言い表すのに電気の比喩に加え、水道の比喩を用いている。

予は予の目の前にある浄水溜池を見て常に考へる、それは何かといふに、東京の人士は毎日毎夜此処から輸送<sup>おくる</sup>の水を飲で生命<sup>つな</sup>を緒いで居る、処で若し此池の中に毒薬を

注ぎ込まんか東京の人士は忽ちにして死んで仕舞ふ、これは即東京人士の生命の水である。此の如くに吾々の小雑誌（聖書之研究）も一つの水道浄水池でなければならぬと思ふ。今日に於て日本人士の要求するものは学問でもなければ器械でもない、即生命の水である。それだから此淀橋水道の水が東京幾百万の住民を救ふが如く、精神界には此小雑誌が一条の泉水となつて溢れ出て以て社会の生命を新にする様にとひたすらに祈禱するのである。（内村鑑三全集 9:300）

内村は、東京に住む人々が生きるために必要な水と「キリストの福音」を掛け合わせている。「紙上の教会」である『聖書之研究』を、水の源である浄水池に見立てて、その「生命の水」である福音を、社会に溢れさせることの重要性を説いている。

赤江は、「紙上の教会」が可能にする交通は「トンネル」のようなインフラであり、都市や社会に網の目のように張り巡らされた「トンネル」を通じて、読者に「生命の水」を飲み、そして「社会の生命」が新たにされることを目論んでいたと主張する（赤江 2013:107）。つまり、こうした雑誌メディアによって仮構される「トンネル」が、「紙上の教会」としての無教会が存在する場であり、そうした読者によるネットワークを利用して、「社会改良」を実践しようとしたのである。

このように、個人を救済し、作り上げるキリストの福音を、行き届かせる「トンネル」のような役割を「紙上の教会」として内村は捉えていたことがわかった。社会改良の内村の基本姿勢は、福音による個人の改良であったが、それと同時に、雑誌メディアによるネットワークを作り上げることも、内村にとって、また無教会主義にとって重要であったといえる。

では、内村が生きていた頃に作り上げられたネットワークは、その後、どのように変化していったのか。次章では、現代の無教会の活動とその展開を見ていきたい。

## 第4章 現在の無教会主義

### 第1節 現在の無教会主義を調べる方法

この章では、今までの無教会に対する主張をふまえ、現在の無教会主義の実態について考察していく。

現在の無教会主義について述べる前に、無教会の統計的な実態を把握することは難しい。その理由として、無教会伝道者の高橋三郎は次のように述べている。

無教会はその信徒の統計を取ることを、きびしく拒否してきた。統計を取ることで自らが、無教會的精神の根本的否定だからである。これは内村の最も嫌った、勢力拡張への関心の表れであり、純粹に福音信仰の精神そのものを、固く守りぬこうとする本来の意図から、逸脱することになる。その上、信者の統計を取ることになると、無教会人とそうでない人との間に、一つの境界線を引かなければならないが、これは外界に対して、完全に開かれた存在であろうとする基本方針からして、不可能なことである。(高橋 1970 : 192)

高橋が語るように、無教会信徒に関する統計的な実態を把握するのは難しいことがわかる。無教会は、制度的なものを排除する精神を持っているため、「統計」という組織の特徴を持った行為は慎まれるということである。本稿では、そうした信徒に関する統計的なアプローチではなく、無教会主義の人々が活動する、NPO 法人今井館教友館を取り上げ、NPO 法人がどのような活動をしているのか調べることによって、「無教会キリスト教とは何か」という問いを明らかにしたい。

## 第2節 NPO 法人今井館教友館

NPO 法人今井館教友館は、内村鑑三や彼の弟子たちの思想と活動を調査研究し、聖書などのキリスト教関連の図書や資料を公開し、公益に資する各種活動を支援し、無教会関連の情報サービスを提供している（「内村鑑三記念今井館教友会」ホームページ）。

また現在、この NPO 法人において「無教会研修所」と呼ばれる活動が行われている。この活動は、無教会主義の特徴の一つである、「信仰を聖書に置く」という精神のもと、個人が聖書を学ぶためのカリキュラムを提供している。聖書講座は、「聖書学」「歴史」「言語」に分かれており、講義形式と通信形式の二通りがある。講師は必ずしも無教会キリスト教徒でなければならないというわけではなく、プロテスタント教会やカトリック教会に所属する研究者も見受けられる。

「聖書学」の講座は、キリスト教の聖典である聖書の内容を講読し、原文で読む活動がなされている。例として、「旧約聖書原典講読」という講座の紹介文を取り上げる。

出エジプト記を共に読んでみましょう。ヘブライ語原文を一語ずつ丁寧に、文法的な語形や文章論的な構造を理解することを心がけます。本文に直に触れることで、翻訳されたものではなかなか実感することのできない、原文のテキストがもつ味の広がりや奥深さを味わうことができます。注意深く読み進めていくと、これまで見過ごされてきた問題や、思わぬ発見に出会えるかもしれません。(無教会研修所ホームページ 2015年度講義内容)

この講座では、聖書の「出エジプト記」の原文を読む講座であり、内容をより深く理解するための援助をしていることがわかる。

「歴史」の講座では、聖書の舞台であるイスラエルの歴史や、キリスト教史についての学習が行われる。また、そうした聖書に関する歴史だけではなく、内村鑑三の人物史や彼の聖書注解の読書会が開かれている。特に、読書会においては、単に講師から教わるのではなく、読んだ本の感想や意見を交換する交わりの場を目指している。

「言語」の講座は、聖書の原典で使われている「ヘブライ語」と「ギリシャ語」を学ぶものである。どちらの講座にも「初級」と書かれているが、文法を学習し、それらの言葉で聖句の暗唱を目指すなど、聖書の理解を向上させるプログラムが組まれている。

また、NPO 法人今井館教友館は「今井館資料館」を管理している。この資料館では、内村鑑三の全著作を始め、内村の弟子たちの著作約1万冊、及び個人伝道雑誌を約250種収蔵し、無教会信徒のみならず、一般にも公開している。

無教会の関係者以外にはあまり知られることがない、自家出版の著作や遺稿集、追悼・記念文集や、地方の小グループや療養所などを基盤とする会報、小証誌、伝道用パンフレットなどを幅広く収集している。

このように、NPO 法人今井館教友館は無教会キリスト教を含んだ、キリスト教関連の資料を保管し、また貸し出すなどしており、自分たちの信仰を社会につなげようとしていることがわかる。特に、キリスト教関連の書物を媒介とした活動は、現在の無教会主義の活動を表す一つの特徴とっていいだろう。また、聖書を学ぶことに非常に熱心であり、その学びのサポートも行っている。

### 第3節 無教会運動としての聖書集会

NPO 法人今井館教友会のホームページによれば、現在の無教会集会として NPO 法人が管理する今井館聖書講堂で行われる集会が 4 つあり<sup>15</sup>、また全国で無教会主義の集会として 12 の集会がホームページ上で紹介されている<sup>16</sup>。この情報は、現在でも無教会主義の活動が行われていることを示すと同時に、無教会がどのように活動をしているのかを知る手がかりとなる。集会の活動実態を調べる上で、全国の無教会集会の一つである「清水聖書集会」を取り上げたい。

清水聖書集会は、静岡県清水区で集会が行われている。毎週日曜日の集会は、主にマンションの個人宅で行われ、講話担当者が聖書をわかりやすく教え、信徒たちによる懇談会も行われている。また、自分たちの集会を、「神学を専門に学び説教する資格のある牧師、神父をもたずに、ただ聖書一冊を拠所とし、神を信じ、イエスを友とし、信仰生活を送る者の集まり」と主張している（清水聖書集会 ホーム）。

この清水聖書集会の集会精神について次のように紹介されている。

私たちの大切にしていることは、霊と真をもって心からキリスト・イエスを受け入れ、信じること、このひとつに尽きます。そのために、誠実な心、静かな心で聖書の御言葉に耳を傾けることをとても大事にします。あくまでも、神中心、聖書中心の集会です。（清水聖書集会ホームページ 清水聖書集会の紹介）

この清水聖書集会の集会精神から、内村が目指していたキリスト者像が浮かび上がってくる。内村が主張した無教会キリスト教、すなわち聖書のみ信仰を置くキリスト教の実践が、この集会にもなされている。聖書の勉強や聖書から得た教訓を分かち合う取り組みがなされており、自分たちの集会を、「神学を専門に学び説教する資格のある牧師、神父をもたずに、ただ聖書一冊を拠所とし、神を信じ、イエスを友とし、信仰生活を送る者の集まり」と主張している。

また、聖書以外の書物によって無教会キリスト教と出会っている人もいる。清水聖書集会の代表者は、『矢内原忠雄伝』に感銘を受け、矢内原の信仰に興味を抱き、キリスト教や無教会を知るようになり、矢内原の信仰を継承する聖書集会へ参加するようになった、と清水聖書集会のホームページ上で紹介されている（清水聖書集会 プロフィール）。読書を



通じて、無教会キリスト教と出会うことは、書物を活かした福音伝道を行っているといえるだろう。

無教会キリスト教の集会の一例として、清水聖書集会を取り上げたが、内村が想定していた社会改良の実践は残念ながら見られなかった。しかし、聖書に重点を置いた信仰、そして書物による伝道が行われていたことがわかった。社会改良まで踏み込んではいないものの、聖書によって「個人を作り上げる」という実践は行われていた。一人一人が、聖書と向き合い、自分自身を省みる実践は、内村の考えていた社会改良のベースであった。現在の無教会キリスト教は、集会によって内村の思想を大切に守っているといえるだろう。

## 終章 無教会キリスト教とは

本稿では、赤江による無教会の主張を踏まえながら、「無教会キリスト教とは何か」について考察し、論じてきた。まず無教会主義の発端として、内村の「不敬事件」を取り上げ、今までの研究では、内村は「信仰のゆえの拒否」と捉えられてきたが、信仰と愛国心による複雑な葛藤としての「ためらい」であり、そうした躊躇によって、キリスト教の内外から批判を受け、徐々に教会を去っていった。

そうした経緯を踏まえ、内村は無教会主義へと傾いていくが、教会から距離を置いたとき、内村は伝道の場所を模索し始め、雑誌による伝道を開始する。そして、雑誌『聖書之研究』による読者とのやり取りによって、「紙上の教会」という見えない共同体を作り上げる。その共同体によって、各地の「独立信者」の信仰を保ち、彼らとの交流を促した。

また、無教会主義の社会性を考える視点として、内村鑑三の「社会改良」の思想について触れた。「紙上の教会」としての無教会は、内村の考える社会改良の手段であり、雑誌で出来上がったネットワークを駆使して、内村が個人を作り上げると考えていた「福音」を社会に提供し、それによって社会を改良しようと試みた。

そして、現在の無教会主義の動向として、NPO 法人今井館教有会を調べ、聖書やキリスト教に関するものだけでなく、内村や無教会関連の資料も公開し、本や書籍による学びの場を提供している。

こうした無教会の歴史と試みを追ってきた中で、本稿で明らかになったのは二つある。ひとつは、無教会キリスト教は、活字にメディアによって、自分自身の生活を見直す機会

を与えている思想である。内村が築き上げた「紙上の教会」は読者一人一人に対して、読んで考えさせ、聖書の言葉を読者自身に身につけさせようとした。また、現在の無教会主義の活動においても、個人で聖書と向き合うように促す取り組みがなされており、書籍などの資料を保管するなど、活字による活動が多い。

もうひとつ明らかになったのは、無教会の社会性を発見できたことである。前述にもあるとおり、無教会による研究は、おもに集会に重きを置いた研究が多く、内村や他の無教会知識人の社会批判は研究をされてきたものの、無教会としての社会性はあまり論じられてこなかった。赤江によるメディア論から捉えた無教会は、そうした社会性を見出す上で重要な視点となった。特に、無教会による「社会改良」は、「紙上の教会」がその実践の手段であり、内村は宗教の範囲でとどまらず、宗教と社会とを両立させようとしていた。

以上が、本稿で明らかになったことである。本稿では、矢内原忠雄といった内村の弟子たちが受け継いでいった無教会についての考察がなされなかった。彼ら無教会知識人たちは、戦後日本社会において一時的ではあるが、注目されるようになる。今後、無教会について考察するとき、彼らによる近代日本社会に対する批判が無教会主義の思想にどれほど影響をうけていたのかに注目し、無教会主義のもつ社会的な意義をより深く探っていきたい。

## 注

- 1 詳しい情報は、総務省統計局が公表している『宗教統計調査 平成 26 年度』を参照。
- 2 1885 年-1973 年。農商務省参事官、聖書研究者であった。
- 3 1893 年-1961 年。東京大学教授（植民政策学）、東大総長を歴任した後、伝道者として活躍。
- 4 1886 年-1970 年。聖書研究者であり、無教会キリスト教の伝道者。
- 5 旧制高等学校のひとつ。東京大学教養学部の前身。
- 6 正確には「教育ニ関スル勅語」。勅語の形式で発布された近代日本の教学の最高規範書。
- 7 この校長代理は、教頭の久原躬弦である。
- 8 現在のインフルエンザのこと。
- 9 明治時代に新潟に存在した、県内最初のキリスト教主義の私立男子学校。内村は、わずか 4 ヶ月で退職している。
- 10 内村の代表的な思想。内村鑑三は、アメリカのアマスト大学の卒業後、ハートフォード神学校に入学するが、伝道事業が職業化していたアメリカのキリスト教への失望と不眠症の悪化により退学する。日本に対して配慮した形のキリスト教への考えを作り上げる

---

必要を感じ、そのため、内村が元々持っていた日本への愛国心と外国人宣教団体に頼らない信仰、すなわち聖書信仰により「二つのJ」を信仰するようになった。

- 11 内村を含む札幌農学校の学生たちによって、1881年に立てられた教会。
- 12 1900年の7月末から8月にかけて開催された『東京独立雑誌』の読者参加イベントのこと。
- 13 新宿の角筈（現在の新宿区西新宿、歌舞伎町および新宿の一部）の内村の自宅で行われた一高・帝大の学生を中心とした、聖書の研究や意見を交換する祈祷会。
- 14 内村をはじめ、黒岩涙香、堺利彦、幸徳秋水といった「萬朝報」の記者たちによって1901年に結成された、社会改良団体。
- 15 集会名は、ウィークデイの集い、渋谷聖書集会子ども会、無教会自由が丘集会、嘉信読書会である。
- 16 12の集会は、今井館高円寺東集会、無教会横浜さかえ集会、無教会全国集会、あぶくま無教会、無教会 駒込キリスト聖書集会、東中野聖書集会、経堂聖書会、高槻聖書キリスト集会、渋谷聖書集会、徳島聖書キリスト集会、福岡聖書研究会、清水聖書集会である。これらの集会は日本各地で開かれている。詳しくは、「NPO 法人今井館教友会 リンク集」を参照。

## 参考文献

- 赤江達也,2013,『「紙上の教会」と日本近代—無教会キリスト教の歴史社会学』,岩波書店
- 土肥昭夫,1962,『内村鑑三』,日本基督教団出版局
- 家永三郎,1956,「日本思想史上の内村鑑三」鈴木三郎編『回想の内村鑑三』,岩波書店,114-120
- 家永三郎,1998,『家永三郎集』,岩波書店
- 岩野祐介,2013,『無教会としての教会：内村鑑三における「個人・信仰共同体・社会」』,教文館
- 森有正,1979,『森有正全集 第7巻』,筑摩書房
- 永嶺重敏,1997,『雑誌と読者の近代』,日本エディタースクール出版部
- NPO 法人今井館教友会「無教会研修所 2015 年度講義内容」  
(<http://homepage3.nifty.com/mukyokai/curriculum2015.html>) 2015.12.21 閲覧
- NPO 法人今井館教友会「無教会集会の紹介；ホームページへのリンク」  
([http://www.imaikankyoyukai.or.jp/public\\_html/link\\_page.html#hplink](http://www.imaikankyoyukai.or.jp/public_html/link_page.html#hplink)) 2015.12.21 閲覧
- NPO 法人今井館教友会「内村鑑三記念今井館教友会」(<http://www.imaikankyoyukai.or.jp/>) 2015.12.21 閲覧.
- 小沢三郎,1961,『内村鑑三不敬事件』,新教出版社
- 堺枯川,[1902]1984,「理想団晩餐会の記」『萬朝報』4月3日(鈴木範久編『内村鑑三談話』岩波書店,所収)
- 関根正雄,1981,『関根正雄著作集 第2巻』,新地書房
- 澁谷浩,1988,『近代思想史における内村鑑三』,新地書房
- 清水聖書集会「清水聖書集会 ホーム」(<http://simizuseishoshuukai.jimdo.com/>) 2016.1.4 閲覧
- 清水聖書集会「清水聖書集会の紹介」(<http://simizuseishoshuukai.jimdo.com/清水聖書集会の紹介/>) 2016.1.4 閲覧
- 清水聖書集会「清水聖書集会 プロフィール」(<http://simizuseishoshuukai.jimdo.com/プロフィール/>) 2016.1.4 閲覧
- 総務省統計局,『宗教統計調査 平成26年度』  
(<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001055055&cycode=0>) 2015.12.23 閲覧

高橋三郎,1970,『無教会精神の探求』,新教出版社

内村鑑三,1938,『余は如何にして基督信徒になりし乎』(鈴木俊郎訳) 岩波書店

内村鑑三,1949,『内村鑑三 ベルにおくつた自叙傳的書翰』(山本泰次郎訳) 新教出版

内村鑑三,1980-1984,『内村鑑三全集 (全 40 卷)』,岩波書店